

思い出のガネフォ

内田 啓一 (76歳)
(日本大学出身)

「光陰如矢」あっと、云う間に半世紀、50年が、かけ抜けました。皆様も社会の荒波を乗り越え、子供たちも無事、育て上げ、今は悠々自適の年金生活を送っていることと思います。

例えば、1963年(昭和38年)11月、日本水泳連盟の猛反対を振り切り、GANEF0(新興国スポーツ大会)に出場致しました。当時、関東水球リーグ一部、日大、中央、成城、法政の精鋭12名の軍団を編成し参加する事になりました。このいきさつを、古い記憶を辿りながら、完全ではありませんが思い出してみました。

・なぜ参加できないのか？

当時、開催国インドネシアは「IOC」(国際オリンピック委員会)を脱退、それに伴い国際水泳連盟から除名され未加入国でした。国際水連の規則により国際大会に於いて未加入国との競技は禁止されていました。勿論日本体育協会も、日本国不参加を表明しましたが、他競技の各日本連盟は容認していたとの事でした。

・ガネフォの開催

当時のインドネシア大統領スカルノは、オリンピックに対抗して、新興国を起点とした、国際大会をインドネシアのジャカルタで開催致しました。世界にアピールする為にも、どうしても大国日本の出場を必要としたのでしよう。「日本不参加阻止」の発端は、同国、現地に深い関係を持つ日本商社の努力でした。日本財界のバックアップ、日本政府のもと、特に当時の副総理、川島正次郎の存在なくしては・・・

・日本チームの参加

経過はどうあれ、日本参加が決定しました。我が水球チームは、最初、慶応大学に要請がありましたが、伝統ある慶大OBの猛反対で実現不可能となりました。そこで、慶大OBで当時キーパーの井形氏、故菅久氏が中心となり12名の選手団を編成しました。

対外試合禁止令の出されている我々チームは、日本水泳連盟を脱退し、日本代

表ではなく、あくまでも個人的資格で「東京クラブ」を結成し、参加する事に至りました。楽しく素晴らしかった大会、一生懸命頑張った試合、すべてが思い出です。その中でも、印象深い事柄がありました。大会に備えての南伊豆（峰温泉）温泉プールでの合宿練習、選手村での冷房なし、蚊帳（カヤ）吊り室での生活、世話人マナツ君、そして、ジャカルタの夜、ベチャ（輪タク）に乗って（右の写真）の楽しさ探索・・・思い出いっぱい・・・



・大会終了後

そして月日は10年経過、日本水泳連盟は動いた。当時の水球委員長小谷氏（慶大OB）及び水球委員会の了承のもと、我々全員の水連復帰が認められました。振り返ってみますと、各大学のOBの猛反対を振り切って参加したGANEF0は、若き日の情熱、経験は、私達にとって青春の1ページとして、一生涯の思い出として残るでしょう。

稿の終わりに当たりますが、この日（2013年11月21日開催のガネフォ50周年の会）に無念にも、再会出来なかった物故者、田中信義・浜野武人・菅久尚武 三君に心より哀悼の意を表します。

またの再会を楽しみに・・・



病院のスタッフ達 前列中央 私（内田）